

平成29年

8月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

(果樹) 東予地方局産業振興課産地育成室

(畜産) 東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0898) 68-7322(代)

TEL (0897) 57-9122

【作物】

1 品種・田植期別の穂肥施用時期 (出穂期・成熟期は目安)

品種名	田植期	穂肥(出穂20日前)		出穂期	成熟期
		NK化成特11号 又はしあわせ化成	施用量 (10a)		
きぬむすめ	6/1	7/26頃	30kg	8/15頃	9/22頃
	6/10	7/28頃	30kg	8/17頃	9/25頃
ヒノヒカリ	6/10	8/5頃	30kg	8/25頃	10/5頃
	6/20	8/8頃	30kg	8/28頃	10/10頃
にこまる	6/1	8/5頃	30kg	8/25頃	10/7頃
	6/10	8/9頃	30kg	8/29頃	10/12頃
松山三井	6/10	8/11頃	30kg	8/31頃	10/16頃
	6/20	8/15頃	30kg	9/4頃	10/21頃

・その他: 「あきみのりV550号」を使う場合は、出穂25日前に30kg/10a施用(穂肥がゆっくり効く)。

2 水管理について

- 中干し直後: 2~3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- 幼穂形成期~穂ばらみ期: 土壌水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- 出穂期~出穂期以降: 浅水管理(2~3cm)をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- 登熟期: 灌水して土壌に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度(飽水状態)にします。
- 落水期: 落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ちます。

3 病害虫防除について

防除時期	病害虫名	農薬名 濃度・使用量 使用時期
8月中 ~下旬 (出穂期前)	いもち病・もみ枯細菌病 ・内穎褐変病・紋枯病・ウンカ類幼虫・ツマグロヨコバイ幼虫・ニカメイチュウ・コブノメイガ	アブロードロムダンモンカットエアー (750倍 収穫21日前まで) +ブラシンフロアブル (1,000倍 収穫7日前まで) (粉剤の場合: イッカツエース粉剤DL 3~4kg/10a、穂揃期まで)
8月下旬~ (穂揃期 ~傾穂期)	カメムシ類 (ウンカ類、ツマグロヨコバイにも有効)	スタークル顆粒水溶剤 (2,000倍 収穫7日前まで)

・その他: コブノメイガが多発した場合は、バダシSG水溶剤1,500倍(収穫21日前まで)で防除して下さい。また、稲こうじ病は、前年度多発した圃場では菌密度が高いため再発の可能性がります。出穂20~15日前にドイツボルドーA2,000倍(出穂10日前まで)を予防散布して下さい。他剤との混用はできません。

・カメムシ対策: 出穂2週間位前までに、畦畔・休耕田の草刈りを行って下さい。乳熟期から糊熟期が最も被害が大きく、この時期に当たる出穂10~15日後に防除を実施して下さい。

<山橋>

【野菜】

1 さといも

(1) 病害虫防除

ア 疫病

8月は、孫芋と子芋の肥大・成熟期のため、感染しやすく、台風の襲来による長時間の降雨により発生が拡大します。ジーファイン水溶剤で定期散布を行い、予防に努めて下さい。発生を確認したら、発病葉を除去して、アミスター20フロアブルを散布して下さい。展着剤は、さといもは散布した液が付着しにくいので、まくびか10,000倍を加用して下さい。また、葉害の軽減するため、植物体内に十分水がある状態で、夕方の防除を心掛けて下さい。

薬剤名	病害名	希釈倍率	使用時期/回数	特徴
ジーファイン水溶剤	疫病	1,000倍	収穫前日まで / -	予防効果 高温多湿時葉害を生じる場合がある
アミスター20フロアブル	疫病	2,000倍	収穫14日前まで / 3回	予防及び治療効果がある 他の殺虫剤との混用はさける 高温多湿時葉害を生じる場合がある

イ ハダニ類

梅雨明け後、増加する傾向であります。発生初期にコテツフロアブル2,000倍(収穫7日前/2回)、又はコロマイト乳剤1,000倍(収穫前日/2回)等で防除して下さい。

ウ ハスモンヨトウ

8月は多発するため、発生初期の集団でいる若齢幼虫の時期に防除する。薬剤はマトリックフロアブル2,000倍(収穫7日前/3回)、又はラービンフロアブル750倍(収穫3日前/2回)で防除して下さい。

(2) 水管理と追肥

ア 全期マルチ栽培は、晴天が続く場合畝間の土の状態や生育状況をよく観察して灌水します。

イ 日中、溝に水が溜まったままの状態では、水の温度が上がり根傷みの原因となりますので、夕方の灌水に努め、日中には停滞水が残らないよう注意して下さい。

ウ おおなか作業を行った化成体系のさといもは、おおなか1ヶ月後を目安にして「あおぞら化成」を40kg/10a流し込みして下さい。

2 やまのいも

(1) 水管理と追肥

8月上旬に、MB粒状固形を80kg/10a施用します。最終追肥が遅れると、芋の形状の乱れが心配されるので注意して下さい。

開花後、栄養生長から生殖生長に移行し、吸肥力も8月上旬~9月にかけて最大となり、この時期に土壌水分を最も必要としますので、定期的な灌水により適湿を保つようにします。

(2) 病害虫防除

病害虫名	薬剤防除法		
	使用薬剤	散布濃度・量	使用時期/使用回数
ハダニ類	コロマイト乳剤	1,000倍	収穫7日前/2回
	マイトコーネフロアブル	1,000倍	収穫3日前/1回
ナガイモコガ	ブレバソソフロアブル5	2,000倍	収穫前日/3回
シロイチモジヨトウ	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍	発生初期(ただし収穫前日)/-
炭そ病	ペンコゼブ水和剤	600倍	収穫21日前/4回
	ダコニール1000	1,000倍	収穫30日前/6回

<越智>

【果樹】

1 摘果

着果量に応じた摘果を行い、目標とする大きさの高品質な果実の生産と来年の着花確保を図ります。

(1) 温州みかん

着果量が多く樹勢低下が心配される樹は、先月に全摘果を行った樹冠上部以外の着果部の摘果を始めて下さい。

着果と新梢発生のバランスがよい樹は、9月以降に重点を置いた後期摘果を行い、着果ストレスによる果実品質の向上に努めます。

樹冠上部を摘果して夏芽を発生させた樹は、ミカンハマグリガ(エカキムシ)の防除を徹底して、次年産用の健全な結果母枝を確保します。

(2) 中晩柑類

着果量の多い樹は、早急に摘果を行い樹勢維持と果実肥大の促進に努めて下さい。仕上げ摘果は、8月上旬頃までに完了して下さい。

2 灌水

土壌の過乾燥は、果実の生育阻害(小玉果、酸高果実)や樹勢低下を助長するので、適切に灌水を行います。

温州みかんは、葉の巻き具合(葉の萎凋が朝になっても戻らない)、旧葉の落葉状況等をみながら、7日間隔で10~20mm(10~20t/10a)を目安に灌水して、適度な水分ストレスを維持します。

中晩柑類は、高温、土壌乾燥が続けば7日間隔で20~30mm(20~30t/10a)を目安に灌水を行って下さい。

特に、甘平は、梅雨明け後から8月までの間に土壌乾燥が進むと、その後裂果が多発する傾向があるので、注意が必要です。

3 病害虫防除

黒点病防除は、前回散布後の累積降水量200~250mm、又は30日の間隔で定期的に薬剤散布して下さい。本病に弱い品種は、散布間隔を短くします。また、伝染源となる枯れ枝は除去して下さい。

そのほか、ダニ類、カミキリムシなどの防除をします。極早生温州は、収穫前日数に注意して下さい。

<本田>

【花き・花木】

1 シキミ

(1) 病害虫防除

高温期に多発する害虫は発生初期に防除を実施し、お彼岸出荷に備えて下さい。ダニにはコテツフロアブル2,000倍、アブラムシ・ハマキムシにはスプラサイド乳剤1,500倍、病害対策にはトップジンM水和剤1,000倍を散布して下さい。

(2) 下枝の整理

株元の古枝や細い下枝が込み合ってくると、病害が蔓延したり防除作業がやりにくくなったりします。また、収穫枝の伸張が悪くなるので、適宜切除して風通しを良くして下さい。

(3) 荷造り

採取した切り枝は、病害葉や古葉、実などを取り除きます。出荷先の規格に合わせて、輪ゴムや紐で元を揃えて束ね、日陰で10時間以上、水揚げをして下さい。

2 シンテツパウユリ

(1) 灌水

この時期の極端な乾燥は、品質低下の要因(葉先焼け・草丈不足)となり、価格に大きく影響しますので、十分な灌水を行います。収穫期に入り、高温・干ばつが続く時は、日中に葉水を与えます。

(2) 追肥

葉色を保ち光沢を出すため、出蕾後は福瀬太陽液肥(600倍、農薬混用可)を収穫始めに1回散布し、8月上旬に2回目を散布して下さい。

(3) 強風対策

フラワーネットの支柱補強をするとともに、ユリの生育に応じて上げ、ユリをネットの枠内に入れ、倒伏を防止します。風で曲がった茎は半日以内であれば修正が可能なので、まっすぐに直します。

(4) 病害防除

葉枯れ病が多くなります。収穫期でも汚れの少ないフルピカフロアブル2,000倍を散布して下さい。

<日野>

【畜産】

8月に入ると、家畜の夏バテが目立つようになります。端的な症状としては、体内にこもった熱を下げるためバンティング(口をあけて早めの呼吸)をするようになり、食欲不振や大量の水を飲み、結果下痢のような症状に陥ります。その結果、成長、肥育だけでなく繁殖障害も起こし、経済的に多大な損失となります。日頃の観察で家畜のサインを見逃さないようにしましょう。

体温測定で夏バテを簡単にチェックする方法もあります。最近のペット用体温計は安くて割れにくく、肛門からの挿入で簡単に測定できます。慣れれば1分もかかりません。

それぞれ家畜の一般的な標準体温は、
子牛 38.5~40.5℃ 子豚 38.5~39.5℃ 鶏ヒナ 42℃前後
成牛 37.5~39.5℃ 成豚 37.5~38.5℃ 成鶏 41℃前後

人間も含め家畜の体温は常に微妙に上下の波があり、0.2~0.5℃の範囲で上下しております。また、朝は低め、夕方は高め傾向があります。標準体温と比べ微妙である場合、1回の検温結果だけで判断せずに翌日同時刻頃の再度検温が必要です。

前日の体温と比べて翌日早朝から標準の体温よりも高いまま推移しているのならば、危険信号です。感染症との類症鑑別が必要ですので、速やかに担当の獣医師に連絡、相談して下さい。

<二神>